平成30年度第2回　立川市文化振興推進委員会　会議録（要旨）

開催日時	平成31年2月14日（曜日）　午後1時～3時
開催場所	立川市役所　203会議室
次第	1.開会 2.立川市の主な文化振興の取組 3.今期を振り返って～これまでの意見交換と第３次文化振興計画 4.次期計画について 5. その他
配布資料	・平成30年度　立川市の主な文化芸術振興の取り組み ・立川市第3次文化振興計画成果指標 ・平成29年3月24日～31年3月23日　立川市文化振興推進委員会 ・立川市第4次文化振興計画策定について ・立川市第4次文化振興計画策定スケジュール ・平成30年度第1回立川市文化振興推進委員会会議録（要旨）案
出席者	［委員］（敬称略） 今井良朗（委員長）、酒井美恵子（副委員）、伊東功、高木誠、中込遊里、堀江けんいち、槇島藍、宮田龍之介、綿引康司 ［事務局］ 渡辺晶彦（産業文化スポーツ部長）、比留間幸広（地域文化課長）、 加登義明（地域文化振興財団事務局長）、 足立香織（地域文化振興財団事務局次長）、柳澤彰子（文化振興係長）、 二ノ宮真輝（文化振興係）、小川始（市史編さん担当主査）
公開及び非公開	公開
会議結果	今期の文化振興推進委員会について振り返り、意見交換を行った。
担当	産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係 電話　042‐506‐0012

1. 開会

・委員長の司会により開会

・事務局より、資料について確認があった。

2. 立川市の主な文化振興の取組

・事務局より、平成 30 年度の主な文化振興の取り組みについて、資料の説明があった。

・市史編さん事業について、事務局から概要と取り組み状況の説明があった。

（委員長）西地下道のアート化事業が具体化し、うれしい。この事業に関わっている武蔵野美術大学の齋藤啓子先生が今後も立川市の文化芸術活動に関わっていただけるとありがたい。「第 3 次文化振興計画」と具体的な活動がうまくリンクしている。立川市の計画が、全体としてとらえられ、反映される状況になっている。

3. 今期を振り返って～これまでの意見交換と第３次文化振興計画

・事務局より、第３次文化振興計画について今期の主な意見交換をまとめた資料の説明があり、改めて感じたことや追加したいことについて、意見交換を行った。

＜Ⅰ　ふれる、たのしむ～暮らしの中に文化芸術を感じることのできる環境をつくる～＞

（A委員）　年に 1 回の石田倉庫のオープンアトリエの紹介をした。そうした祭りの「ハレ」の日ではなく、日常の「ケ」の日の活動にふれられる場を創作しても良いのかもしれない。

（委員長）　「ハレ」と「ケ」がうまくつながったとき、「ハレ」が「ハレ」になる。

（B委員）　継続していくことが大切。

（事務局）　石田倉庫は小・中学生に開放しているのか。

（A委員）　していない。1 つ陶芸教室があり、私も絵画教室を始める予定。アトリエなので、気軽に外部の方を入れられない活動もあるが、もう少し危ないイメージを払拭したい。

（委員長）　地域の中にどんな場があるのか、チェックしてみることが必要。

（事務局）　文化協会の「吹奏楽友達コンサート」は、今ではほとんど財団の支援がなくても「市民自らが行う」活動として、合唱団や学校なども関わり素晴らしい成果を上げている。

（委員長）　基本的には自分たちでやっていくという形ができることが望ましい。立川の特徴でもある財団の役割がうまく生きた結果、そうした形にたどりついたのだろう。

（C委員）　新しい美術館の検討を進める中で、まさに「ふれる、たのしむ」の目線が変わってきた。今まで立川は「ギャラリー」で、作家を支援することに視点を置いていた。今度は「美術館」で、皆さんに見てもらう。これは大きな変化。市にはいろいろと協力していきたい。

（委員長）　子どもたちがどういうリテラシーを持っていくかが大切だ。文化芸術に触れる場がたくさんあれば、それだけリテラシーも高まるだろう。

（副委員長）　国立音楽大学には楽器学資料館がある。入館無料、面白い楽器がたくさんある「場」である。

（事務局）　年 1 回、広報で参加者を募集して「国立音楽大学見学＆コンサート」を行い、最近は「楽器学資料館」を見学している。丁寧に解説していただき、とても喜ばれている。

＜Ⅱ　はぐくむ、ささえる～子どもや若者の感性を育む、アーティストを支援する～＞

（Ｄ委員）　中高生と創るシェイクスピア劇は、今年も始まっている。今年は、八王子の文化財団と提携し、５月は立川、７月は八王子で発表する。立川から多摩地区へと活動が広がる第１歩が踏み出せた。八王子は学校が多く、学生演劇祭がある。12 月の学生演劇祭の募集がちょうど７月にあり、１年間の流れができた。

３年間ワークショップをやったが、立川からの参加者は本当に少なかった。府中、日野、八王子が多く、学校の数が影響していると思う。「多摩地域」に広げて考えれば、子どもはいっぱいいるし学校はたくさんあるので、地域を超えて手を組んだ方がよい。八王子の財団は、立川の財団とも相談しながら、この取り組みを進めている。

先日まで私の劇団は、横浜の国際演劇祭に参加していたので、このワークショップに参加した中高生 50 人を招待したが、来たのは４人くらい。横浜は遠く、中高生が一人で行くのは難しかったのだろう。来てくれたら、きっと影響を受けてくれただろうし、いい機会になったと思う。遠くて見に来てもらえないのが悔しかった。せっかくつながることができて、一緒に演劇をつくろうとした仲なのに、なぜ私の作品を見てもらう機会にならなかったのか。立川とか八王子とか、彼らになじみのある多摩地域でやれば見に来てくれるはず。中高生に、私の公演でなくてもよいので、30 代・40 代の若手の、今頑張っている勢いのある公演をみてもらいたい。良い公演を見る機会、若手の公演を近場で見られる環境が必要。見ると自分が演るときの参考になる。

（委員長）　横浜でやらざるを得ないというのは、場所がないということか。

（Ｄ委員）　国際演劇祭は横浜でやっているものなのでしかたないが、北千住で東京公演があり、そのときに来たのも６～７人。私の気持ちとしては多摩地区でやりたいが、場所がなかなかないし、まだ「地域密着」でできる状況ではない。たちかわ創造舎のメンバーたちが、立川で創作しても上演は三鷹より向こう。都心でないと客が集まらない。

でも本来は、この地域で作っているのだから、この地域で上演して、この地域でファンをつくっていきたい。「隣に住んでいるらしいぞ」という状況がみんなをつなげ、「立川にはこんな面白い劇団がある」「こんなおもしろい人がいる」となって、「あの人が出るなら横浜にも行ってみようか」と広がっていくのが理屈なのではないか。

（Ｂ委員）　どうしても「都下」という意識があって、23 区に行く人が多い。その価値観・感覚を変えるのはハードルが高い。拠点が一つあるといい。立川にミニシアターができるが、そこを求めて人が集まるような拠点になるといい。

（委員長）　先ほど「地域密着」でできる状態に至っていないという話だったが、その辺はどうか。

（Ｄ委員）　私たちの公演は、小劇場でないと難しい。立川には手ごろな大きさの劇場がない。お寺など、劇場じゃないところならあるかもしれないが、本当は劇場でやるべき。公共ホールは、自分がやるにはまだ集客力や力量が足りないと思う。まず無理のないキャパ数のところで１回やってから、その後、RISURU ホールで。または、立川を拠点にしているアーティストがまとまって、一つの大きな企画を力を合わせてやるのもあり。

（委員長）　おそらくこの辺りも次の計画の項目の一つに入ってくるだろう。大きなホールでもそうでなくても、ある程度の規模できっちりできる、そういう場所が、あるようで意外とないのではないか。おそらく音楽でも同じだろう。

（事務局）　「見てもらえなくて悔しい」と聞くと「すごいな、見に行きたいな」と思うが、案内

状や「招待」の文字だけでは伝わりにくいのかもしれない。「ふれる、たのしむ」のところのインパクトがどれだけ大きかったかが一つのバロメーターになる。例えば楽器の演奏会を聴いて、どれだけの人が「また聴きたい」とか「自分もやってみたい」とか、次のステップに進むか。そこに効果をどれくらい与えられるイベントだったかが求められてくる。ただ、何人かでも来た人がいたのだから、何年か続けていけばまた変わってくるのではないか。じっくり取り組んでいただきたいと思う。

（委員長）　様々な条件をクリアしていく必要がある。そういう点でも継続性はすごく重要。

（事務局）　「ふれる、たのしむ」のところで出た意見に「演劇に関して言えば、たちかわ創造舎は発表する場ではない」というものがある。旧多摩川小学校の有効活用を検討した際、民間提案としてたちかわ創造舎が選ばれた。その母体の NPO は、既に豊島区で演劇を核とした活動の実績があり、行政も見に行ったが、体育館を演劇の練習や発表の場として活用していた。旧多摩川小学校では体育館をずっと使うことはできないということになり、場の拠点にはなりえなかった。しかし、演劇という文化芸術の一つのジャンルを立川で根付かせたいという意向が反映され、少しずつ演劇の認知度が上がってきている感じがする。

場の問題はいろいろと難しい部分がある。公共の施設で全部をカバーできる現状ではなかなかない。民間の力を借りたり、空き店舗や空き家を活用したり、民間で使用しているところを一時的に借りたりと、ちょっと時間はかかるかもしれないが、何らかの形を探していくことが重要な気がする。

（委員長）　これも、難しいが重要な課題。

（Ｅ委員）　私の時代には、ダンスや演劇の世界では「公共」は見向きもされなかった。バイトをしながら、どこかスペースを見つけては公演をしていた。今は安定の時代なのかもしれないが、昔の方が活気があった。学校もカリキュラムが決まっていて、柔軟な対応は難しい。美術や音楽の時間も減っている。学校の先生も疲れている。本当は、そのあたりを地域が支え、外に出れば演劇をやっている、芸術家が学校で指導をする、といった環境を整えていけるとよい。

（委員長）　そういうことは、いろいろな立場の人が協力し合わない限り実現できない。

サードプレイスの話が出ているが、どこにそういう場所を作っていくか、いろいろな場所をチェックしていく必要がある。もともと住宅だった場所がミニシアターになった例がある。倉庫やいろいろな空いている場所に、少し手を入れてそういった場所を作っていけば若干、解決につながるかもしれない。

（事務局）　演劇的な手法については、創造舎との住み分けを考える必要がある。

また、財団の小学校訪問事業は、始めたころは、先ほどのお話に合ったようにカリキュラム等の問題もあり、受け入れていただくのが難しく３校程度だった。その後、教育委員会の協力もあり、現在では年間延べ 40 校以上を回るようになり、これは全国的に見ても数が多い。いろいろな協力を得ながら、継続していくことは大切だ。

（Ｄ委員）　立川ならではの個性、立川という場所の個性は必要だ。ファーレ立川は、重要な個性だと思うが、今回のファーレ立川アートミュージアム・デーの演劇が「再演」なのは、なぜか。

（事務局）　昨年の公演の評判がよく、もう一度観る機会が欲しいという声があったことや予算の

問題などによる。

（事務局）　来年度、グリーンスプリングスに大きなホールができる。そうなると、RISURU ホールとの住み分けで、地域密着型の演劇などは RISURU ホールが利用される可能性が出てくる。

（Ｆ委員）　公共施設の再編計画があると聞いている。文化振興計画で考えている「場」の問題と無関係ではないと思うが、どのように考えているのか。

（事務局）　公共施設の再編については、総合政策部の行政経営課を中心に検討している。「公共施設のあり方方針」は公表してあり、少子化による人口減少などから「20 年後に、今ある公共施設の 20％削減」というのが大きな方向性。単体の施設はランニングコストがかかるので、規模を縮小・集合化する等、いくつか案を出して、地域の方のご意見を伺いながら協議して進めていく。立川市の地域での文化活動は、他市と比較しても非常に活発で、その拠点を全部なくすことはまずあり得ないと思っているが、方針に基づき、統合したり縮小したりということはあるかもしれない。立川市は競輪事業による収入があったため他市より公共施設が多く、それらが老朽化したりランニングコストがかかったり、お金が必要になってくるという予測をもとに動いている。
総合政策部は、長期総合計画や基本構想を作成し、各所管を俯瞰して政策を進めている。そういう意味では独断で動いているわけではないし、会議等には各所管も出席し、考え方や方針について積極的に伝えている。

＜Ⅲ　つたえる、つなげる～文化芸術の息吹を伝え、その波と輪を広げていく～＞

（副委員長）まちづくり協議会の加入団体数は増えていないのか。

（事務局）　加入するという仕組みがあまりうまく動いていなかった。サポーターや事業への協賛金などという形で、協力したり関わったりしてくれる方は増えているが、当初の見込みのように、企業等大きな単位での加入は増えなかった。加入の仕組みや要綱の整理についての話は、まちづくり協議会の中でも出ている。

（事務局）　指標については、別途議論の必要がある。

（委員長）　ネットワークの作り方に、人的ネットワークと社会的ネットワークの２つの側面がある。

（Ｂ委員）　文化芸術のまちづくり協議会の HP「立川ビルボード」に、市民ライターに記事を書いていただき、情報発信するようになった。皆さんとても熱心。次のステップとしては、自分たちでサイトを持って、情報を発信できるようになることを目指したい。
福生在住の自分の高校生の息子にとって、立川市は通学で経由したい大都市。この立川をワクワクした気持ちで見ている人たちに情報を届けたいが、アプローチの手段がない。

（委員長）　この辺りも課題。広域連携は当然考えなければいけない。立川を中心にしているときに、いろいろな情報が立川から外に行かない。

（Ｇ委員）　難しい。「ネットワークを広げる」というところを見ると、海外とは事情が違う。
自分はアーティスト側ではなく、どちらかというと文化芸術に触れずに育ってきたスポーツ派。それでも大人になって社会に出るといろいろなものに興味を持つようになり、何かのきっかけで美術館に行ったときに、アートは面白いなと思った。もっと根本的な教育が必要な話なのかもしれない。文化芸術と言うと難しく考える人が多いが、もっと身近に、取り組みやすくするために何ができるか、考える必要がある。

（委員長）　この辺りも両方ある。発信も重要だが、拠点があってきちんとやっていれば人が来る。来てもらえるようなものをちゃんと作って、発信していく。

（Ｃ委員）　最近、多摩信用金庫は、国文学資料館と連携協定を結び、先日、ロバート・キャンベルさんが講演してくれた。その話の中で「地域との連携」ということを強調していた。国文学資料館は国の組織で、何十万という古典籍の資料を持っていて、すばらしい展示スペースがあるが、ほとんど利用されていない。外国の研究者の利用はあるが、もっと地元の方に使ってもらいたい、と言っていた。なかなか敷居は高いが、向こうから近づいてきている感はあり、地域にとっても非常に大切なコンテンツで、場所でもある。
私たちの組織は「多摩」というくくりで動いているが、行政はどうしても縦割りになってしまう。国立市と立川市の両方にお世話になっていると「一緒にやればいいのに」と思うことがある。民間レベルがそういう意識を持てば、行政もやらざるを得ないのではないか。それが、市の垣根を越えて集まるということにつながるのではないか。

（委員長）　それぞれの役割を明確にしつつ、けれども、別々ではないという関係が作れると一番よい。いろいろな協力ができる関係を作ろうという機運がうまく盛り上がるとよい。

4. 次期計画について

・事務局より、第４次文化振興計画の策定について、資料の説明があった。
・事務局より、委員について、市民委員は改めて公募することと、今期の議論を踏まえた計画策定となることの説明があった。

（Ｂ委員）　文化の計画はどこの市も策定するのか。連携について、他市の文化の計画に書いてもらうことはできるのか。

（事務局）　文化の計画の策定は義務ではない。それぞれの自治体に考え方がある。

（事務局）　利便性など背景が異なるため、連携によるプラス面とマイナス面も各市により異なる。例えば RISURU ホールの施設利用は、連携により立川市民が使いづらくなるかもしれない。イベントを一緒にやったり、RISURU ホールで実施した事業を国立市のホールで行うなどは、できないことではない。

（事務局）　それぞれの市民にとって利便性が高まるので連携はした方がよいし、それは統一将来像「にぎわいと安らぎの交流都市立川」につながるだろう。

（Ｂ委員）　会議に他市の市民が参加することはできるのか。

（事務局）　委員としての参加は、報酬等、それぞれに規定があって難しい。意見交換はできるが、オフィシャルなものがふさわしいかは考えた方がよい。

（委員長）　ゲストに話を聞く機会を設けてもよい。

（Ｇ委員）　文化芸術について、様々な取り組みや文化振興推進委員会のような会議があることが、市民に見えにくいことが広がっていかない原因ではないか。広報力というか、ただ宣伝するだけでなく、背景も発信することが必要。

（Ｄ委員）　委員の交替も広がることにつながる。

5. その他

・副委員長の挨拶によって閉会。

（副委員長）今日の会議に参加しながら、第３次文化振興計画の到達目標と実施項目を考えて、熱い議論をした時のことを思い出した。その計画が成熟してきたのかなと思う。

また、長い期間をかけて市史の編さんをしながら、新しい文化振興計画を考えるというタイミングもよいと思う。どんなメンバーになったとしても、来年度また熱い議論をしながら新たな到達目標が決まっていくことが楽しみだ。

情報が発信されて、体験をして、心が動くと、また次の発信につながるという文化のサイクルになってほしい。

以上